

巻頭言

ミレニアム改革の痛み

山形県社会福祉協議会 会長 會田 鋭一郎



来年四月から実施される「介護保険制度」だけではないが、二〇〇〇年代に移行するミレニアムの改革の中で、この問題は国民に痛みを感じさせる点では最たるもの一つだろう。だが、日本の叡（えい）智（ち）を傾けて、これからの介護は地域社会全体で支えあうこと（方向）を転換したのだから、保険料を取られっぱなしになるのではないかと、この不安や痛みは今後最善の対応により解決していこうというのが、おおむね国民的合意になったものと信じている。

ところが、この国民的合意がまだ不十分だから「慣らし運転」をするという。その中味は、保険料の徴収凍結であり、負担軽減であり、家族介護に対する手当の支給などである。

果然、今更何をとという議論が朝野を問わず起ってきている。

だが、「慣らし運転」の決定も、これらの経緯を百も承知のうえでの苦悩の決断だったのだろう。福祉の現場としてはこれに従うしかないが、過去数年間もこの介護制度の大改革を避けて通れない道として必死に取り組んできた現場からいえば、この「慣らし運転」が、社会全体で支えあうという介護保険制度の基本理念にどのような影響をもたらすのだろうかということを考えざるを得ない。

保険料の凍結や若年者の負担軽減は、いずれ止めるのだろうかから、その時説得するのが大変であっても、基本理念は貫くともいえる。問題は、家族介護に対する手当の支給である。日本の美風の評価であるならば、これは永久に続けなければならぬ。しかし、このことこそ日本の叡智が何年かかっても議論を尽くし、金銭での評価をしないと結論を出したのではなかったのだろうか。

特に山形県は三世帯同居などの比率の高さにも見られるように、親孝行者が多いところである。貧しきところに孝子出ずの類かもし

れないし、親の面倒も見ないやつとの非難を恐れてのことかもしれないが、美風は美風である。県出身の学者渡部昇一氏は、介護保険制度はこの美風を壊すものだとその論文を以前、雑誌に発表している。この考えかたも根強いものがあるし、手当の支給も要望がある。

だが、多くを論ずる必要もないが、もはや現状は、そして将来もこの美風が手枷（かせ）足枷（あし）となつて、幾多の悲劇を生んでいるかに眼を背ける訳にはいくまい。

高齢者を高齢の娘が介護し共倒れになつた話、財産を貰（もら）つたから親の面倒を見るのは当然だと、長男の嫁が兄弟からいびられる話、面倒を見ていないふりをしながら実は親を「いずめこ」に押し込め垂れ流しにさせている話、等々、特に女性の社会進出や少子化の高邁（まい）な議論をしなくとも、美風の継続は破綻（たん）に瀕（ひん）していると認めざるを得ない。

人倫の道は尊いものとしてやれる人はやつたらよい。しかしそれを金銭で評価しようとする、そこにはある押しつけがましさが残るし、ましてや年間十万円を貰いたいがために介護に名を借りた酷（む）い仕打ちがなされないと限らないと思うのは、けつして少数ではないだろう。

もっと現実的なことからいえば、福祉施設の利用や各種のサービスの提供などに相当な影響が出て来ることとも考えられる。

自分の親も人の親もみんな支えていこうというこの制度の基本理念が、もう一度蒸し返されることになりはしないか。今まで何のための激論だったのか、そして千年紀の大改革の痛みは、国民が新しい倫理観で立ち向かうほかはないと考えるのだが、いかがなものであろうか。